

『失われた時を求めて』 初期受容 : 『スワン家の方へ』 をめぐって

禹, 朋子
帝塚山学院大学文学部教授

<https://doi.org/10.15017/21017>

出版情報 : Stella. 30, pp.191-207, 2011-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

『失われた時を求めて』 初期受容

——『スワン家の方へ』をめぐる¹⁾——

禹 朋 子

1913年に『失われた時を求めて』第1巻が発売されてから1世紀が経つ。もはやこの作品を「傑作」と呼ばぬ批評家はいないであろうし、この作品に頁を割かない文学史の教科書というのも考えがたい。と同時に、まるで名作誕生には受難と奇跡が不可欠であるかのように、この作品が当初から高い評価を得ていたわけではなく、むしろ批判の対象ですらあったこともまたしばしば単純化された形で強調される。原稿がいくつかの出版社に拒否され、NRFなどはこれを読みもせず返却したらしいこと²⁾。結局自費出版されたものの、雑誌に掲載された書評は友人たちの書いてくれた記事であったり、新聞の有料欄を利用したものであったこと³⁾。ところがアンドレ・ジッドの「改心」⁴⁾によりまずは続編の抜粋が『新フランス評論』に連載され、そして最終的にはNRFが続刊を出版したこと。第1次世界大戦終結後に刊行された第2巻が1919年にゴンクール賞を受賞するにいたり、世間もこの作品の価値をようやく認めたこと⁵⁾。フランスにおける『失われた時を求めて』の初期受容に関し、これ以外の要素が語られることはどれほどあるだろう。たしかに印象的な物語ではあるが、ステレオタイプ化した伝説の反復は、そこから抜け落ちたものの回復を一層困難にする。

このような単純化には複数の要因が考えられるが、そのかなりの部分は現代の批評や研究の関心のありように帰されるものであろう。ブルーストにかぎらず、当時、文学作品の受容はまず新聞・雑誌といったメディアで行われるのが常であった。そこでの評価が定まった上で著名な批評家やエッセイストが著書でこれを取り上げ、さらには大学での研究対象となる、というのが作家や作品が後世にまで永らえる筋道であった。現在ブルースト人気を支えているのは、批評家というよりは大学を中心とした研究の成果であらう。研究書だけではな

く草稿研究の成果としての信頼できる刊本や、外国にあっては翻訳の出版、書簡や伝記等の資料公表、展覧会や各種催し物の企画。これらの研究者による取り組みは、なによりもまず対象となる作品に内在する価値を認めることから出発する。もしそうであるならば、プルースト作品を批判したかつての文芸批評はすべて無知のなせるわざであり、今さら取り上げる必要性は、その蒙昧を指摘すること以外にはない理屈である。

異質であることと価値の優劣は同一ではない。けれども現代の研究はそのことを十分認識できているだろうか。パスカル・フラヴァロ＝ターヌは近著『フランスとドイツにおける『失われた時を求めて』(1913-1958年)』のなかでプルーストが新聞、雑誌評が自作を誤解していることに苦しんでいたことを強調し、「否定的なものの同様に肯定的なものも、批評はほとんどいずれも的を外しているように思われる」⁶⁾ と言うが、現在の文学研究は、もはやすっかり定着したプルースト神話から自由なのであろうか。

ところで大学を中心とするアカデミズムの世界で現在我々が親しんでいるような文学研究が行われるようになったのはそう昔のことではない。長らくの間、文学研究とはまず作者と作品を知ることであり、そのためのテキスト校訂と源泉研究であり、伝記や文学史を書くことであり、そのようにして一定の規範を次世代へと引き継ぐことであった。ところが第2次大戦以降の文学研究はそれ以前のすべてを歴史的研究、あるいは印象批評として一気に葬り去ってしまうような展開を見せた。1954年に最初のプレイアッド版が刊行され⁷⁾、1971年に生誕百周年による研究熱の高まりを迎えたプルースト研究は丁度この転換の洗礼を受ける。とりわけ1970年代以降のアカデミックな文学研究は、研究手法を実践する素材として文学作品を利用した側面があり、このような研究に『失われた時を求めて』は格好の材料を提供することになった。かかる潮流のなかでこの作品の初期受容のあり方は、実はそれそのものが扱いきれない異質なものであったといえる。

また一方、受容研究にあっては資料にまつわる問題もきわめて大きく、それが研究の障壁となっていることも否めない。プルースト作品の読者は誰であり、彼らはそれをどう捉えたか、その総体を知ることが実は不可能である。したがって、この種の研究は書き残され、発掘・公表された資料を利用するしかないのであるが、20世紀初頭の主要な新聞や雑誌資料はマイクロ化・デジタル化して

公開される一方で、地方紙などは所蔵館も少ないうえに、傷みが激しく閲覧できる状態にないこともある。今後何らかの策が講じられなければ、多くの資料は朽ちていくしかない。しかしもしそのために研究者が容易に入手できる資料にばかり頼っているとすれば、あるいはその傾向が拡大するとすれば問題は大きい。

本稿は以上の点に鑑み、現在入手できるかぎりの資料を収集したうえ、これらに基づいてフランスにおける『スワン家の方へ』発売前後の受容の様相を分析する試みである。まだ完結していない小説をめぐる新聞評の善し悪しを現在の視点から判断したり、あるいはプルーストの論理を絶対視したりすることなく、『スワン』の評判が拡大していく様相や、これをめぐる議論のあり方をできるだけ当時の状況を考慮しながら観察することを試みたい。

関連資料の総体

『スワン家の方へ』初版は1913年11月14日、グラッセ社から発売された。作家の作品も関連資料も時間の経過とともに増加していく以上、ひとつの作品、あるいは巻についての批評のみを取り出すことは容易ではないが、今回は1913年11月から翌1914年7月までにフランス本国で発表された資料を対象とした。開始時期については『スワン家の方へ』について最初に発表された記事が特定できており、終了時期については戦乱の開始という外的事情から関連記事の途絶えることが観察されるからである。

この期間に発表されたプルースト関連資料のうち確認できたのは、純粋な広告が1点、新聞・雑誌記事が53点、図書1点である（ただし記事のうち8点は直接閲覧しておらず、引用によって確認したものであることをおことわりしておく）。また図書1点は前述の記事のうち1点を再録している。このほかにグラッセ社がおそらくは各書店に送付した宣伝文があったことをフィリップ・コルブが指摘している⁸⁾。なお先行研究の書誌情報に挙がっているが確認できないものが3点あった。これらについては情報が誤りであると断定できないものの、今回は検討の対象外とした。

出版社と作者による宣伝活動

1913年の時点でプルーストはすでにラスキンの翻訳のほか、『楽しみと日々』

を出版してはいたが、名の知れた作家であったとは言えない。『スワン家の方へ』発売に当たってはグラッセ社とブルーストがその宣伝活動を積極的に展開したことが書簡の随所にうかがえる。出版前の1913年10月30日、ベルナール・グラッセはブルーストにたいし宣伝についてのプランを説明している⁹⁾。それによると出版予告、抜粋、そして書評を順に利用するのだという。出版予告を掲載してもらうにふさわしい媒体としては『ジル・ブラス』紙、『アントランジジャン』紙の「郵便受け」欄、『タン』紙、『フィガロ』紙の名を挙げ、抜粋については『タン』が最も好ましく、きわめて読者の多い『アナル』紙もよいとしている。最も重要なのは批評であるが、『フィガロ』の一面記事、『タン』のポール・スーデーによる書評、『ジュルナル・デ・デバ』紙の日曜日の記事などを希望している。有料広告は無料で協力してくれた新聞へのお礼のようなものだからその次の段階であるが、使うとすれば偽装書評ではなく^{ブラカール}広告枠にしようとして述べている。出版社としての意見は以上の通りであるが、『スワン家の方へ』発売にあたって実際にはどのような手段が利用されたのであろうか。

広 告

まずは広告であるが、発売当日の1913年11月14日付で『フランス書誌』第3部に新刊のアナウンスがなされている¹⁰⁾。これはグラッセ社から原稿を送付して掲載したものであるから一種の広告と言っていいだろう。また先ほど「純粋な広告」と述べたのは、12月に入って『メルキュール・ド・フランス』に出された出版広告のことで、内容にかんするコメントが含まれている¹¹⁾。この広告文面は、グラッセ社が各書店に送付した宣伝文面を短くしたものであるとフィリップ・コルブは指摘している¹²⁾。当時そのような慣習があったのであれば、これも一般読者ではないにせよ書店向けの宣伝活動の一環と言えよう。

依頼記事

依頼記事については、上記広告を除き、少なくとも20点あると考えられる。書簡からほぼ裏付けられるもののほか、作者ないしは出版社の協力がなければ掲載できないインタビュー記事、作品の抜粋がこれに当たる。さらに依頼記事とまったく同じ文面を使用している記事、著者から写真の提供が必要であったもの、ブルーストが事前に発表を把握していたことがわかっている記事もこの

範疇に入るだろう。もちろん全てのケースについて書簡が残っておりかつ公表されているわけではないから、20点という数字はあくまで最低ラインである。

この時期にグラッセ社とブルーストがもっていたコネクションのうち、資料の裏付けがあるものは『ジル・ブラス』社主のルネ・ブルム¹³⁾、『フィガロ』のガストン・カルメットとロベール・ド・フレール¹⁴⁾、『メルキュール・ド・フランス』のアルフレッド・ヴァレット¹⁵⁾である。『タン』へはブルーストの友人であるレーナルド・アーンやシェイケヴィッチ夫人を介して¹⁶⁾、『ルヴェ・ド・パリ』誌や『ジュルナル』紙、『エコー・ド・パリ』紙へは、やはりレーナルド・アーン、そしてグレフュール伯爵の愛人であったラ・ペロディエール伯爵夫人を介して働きかけをしている¹⁷⁾。このようなコネクションのおかげでルネ・ブルムは発売前の11月9日に予告記事を、ロベール・ド・フレールは16日付で消息記事を、『タン』は13日にインタビュー記事、21日に抜粋を準備してくれた¹⁸⁾。またこの間、『アナル』からは抜粋原稿を提供するよう求められているし¹⁹⁾、『エクセルシオール』紙からは記事を出すので書いてくれる人物を推薦するようにとの連絡があった²⁰⁾。

有料記事

さて、以上のような記事は有料であったのだろうか。裏付けができるのは、ブルーストの友人ジャック＝エミール・ブランシュの記事に関連するもの3点である。ブルーストは友人の画家、ジャック＝エミール・ブランシュが自分のために書いてくれた記事を掲載するため奔走したばかりか、掲載記事の宣伝のために本人には内密に複数の新聞の有料欄を利用したのであった。ブランシュから記事を書きたいとの申し出があったのは、少なくとも出版から1カ月以内のことである。1913年12月初旬にはブルーストはこの件についてジャン＝ルイ・ヴォードワイエに相談している²¹⁾。19日頃には本人に提案のお礼を述べるとともに²²⁾、早速レーナルド・アーンを通じて掲載に向けた根回しを開始する²³⁾。けれども交渉は難航し、いくつもの新聞・雑誌を当たった結果、ようやく翌年4月15日付の『エコー・ド・パリ』に記事が掲載された時²⁴⁾、ブルーストはブランシュに「昨日お宅の近くを通りながらもお目に掛かりに何うのを躊躇したのですが、あなたのすばらしい評論がまさに掲載されようとしていたとは思っていませんでした」と書き送った²⁵⁾。

記事の発表を知ると同時にブルーストはルネ・ブルムにたいし、ブランシュによる書評の抜粋を『ジル・プラス』に掲載してくれるよう依頼している――

もしこれによって広告にかんする問題が生じるのであれば、グラッセは私のためにまだ何も広告を出していませんから、これを始めるいい機会でしょう。貴社担当者が消息記事の費用について請求書をお送りくださればすぐにお支払い致します。²⁶⁾

じじつブルーストはグラッセ社のルイ・ブラン宛て書簡で『ジル・プラス』と『フィガロ』に抜粋の掲載を依頼したこと、また支払いにかんしてはグラッセ社に請求書を送ってくれるよう各紙に要請したことを通知しているのだが、「むろん全額私が払い戻します」²⁷⁾ としていることに注意しよう。いったんグラッセ社が支払う形式を取ってほしいが、自分の負担で記事を出すということである。続いてブルーストは、同様の依頼を『新フランス評論』と『メルキュール・ド・フランス』にも行うと書いているが、こちらは「全く有料ではありません」²⁸⁾ としている。

もう一点、ブランシュの書評にかんする有料記事として確認できるのは『ジュルナル・デ・デバ』のものである²⁹⁾。アニック・ブイヤゲは、ブルーストが自著の宣伝のために自ら書評を書いた例としてこの記事を挙げている³⁰⁾。なるほど原稿をブルーストが自身が書いていることは書簡から確認でき、これをルイ・ブランに送るに当たっては筆跡が残らないようにそちらで書き写してほしいと依頼さえしている³¹⁾。けれどもこの一件について自分の関与をブランシュに知られないようにするため、ブルーストは新聞社との交渉をルイ・ブランにまかせるなどの配慮をしており、じじつは筆跡の問題もその一環なのである³²⁾。ブランシュの記事が『スワン』について書かれている以上、これに触れた他の記事にも小説に関する言及がみられるのは当然である。けれども「新たな文芸批評家」(『ジル・プラス』)、「文芸批評家ジャック＝エミール・ブランシュ」(『メルキュール・ド・フランス』)といったタイトルからもわかるように、それらの記事は画家であるブランシュが文芸批評家としてもデビューしたことに重点を置いている。これら有料記事の主目的はブランシュの評判を広めることにあり、ブルーストが『スワン』宣伝のために有料記事を利用したと単純に言うことはできない。

『スワン』そのものについてはどうだろうか。ブルーストは上に引用したル

ネ・ブルム宛書簡で自作について有料の広告は出ていないと述べている。また第1巻刊行直後、ルイ・ド・ロベール宛書簡に『タン』のインタビュー記事を同封し、これが有料ではないばかりか、グラッセは有料のものは何ひとつ出していないと強調している³³⁾。ただひとつ、ブランシュのための記事手配に関連し、ブルーストは気になることを書いている――

〔『フィガロ』については〕ともかく第1面の^{ミロワール}消息記事でなくてはなりません。『デバ』については「その日その日」欄が一番いいでしょう。〔…〕けれどもこれら全ては『ミロワール』消息欄に掛かった費用の2倍を超えてはいけません（ずっと低い金額であればいいのですが）。³⁴⁾

フィリップ・コルブは週刊誌『ミロワール』にはブルーストにかんする消息記事が確認できないので、問題になっているのは1913年12月21日号に掲載されたインタビュー記事であると推論している³⁵⁾。けれども『フィガロ』の記事は12行、『デバ』は24行、『ミロワール』が掲載したインタビュー記事はそのざっと10倍近い長さであるから、いくら媒体としての規模が違うとはいえ、費用に関する上記の記述とはやや食いちがうようにも思われる。実は『ミロワール』はインタビュー記事の前週、ブルーストについて小さな記事を掲載している³⁶⁾。いわゆる記事というほどの情報量はなく、1頁の誌面に8人の肖像写真が短いキャプションとともに掲載されているに過ぎないものである。「消息欄」という記述にはこちらがより適合するようにも思われるが、やはり金額の点で疑問が残る。いずれにせよ、実際にブルーストが自著のために何らかの有料記事を使ったかどうかを断ずるにはさらに資料が必要であろう。

記事掲載にまつわる実際的な問題

ところで当時、依頼によって消息記事や作品評を掲載してもらうことはどの程度普及した方法だったのだろうか。『新フランス評論』が1914年6月号と7月号に『失われた時を求めて』続刊の断章を掲載し、『フィガロ』が同様の計画を立てた同年7月中旬、グラッセ社のルイ・ブランはきわめて事務的な調子で『パリ・ジュルナル』『オム・リーブル』『タン』そして『ジル・プラス』の各紙に続刊の情報記事の掲載を依頼している。たとえば『ジル・プラス』の担当者、J・J・ブルッソンには次の様に書き送っている――

『ジル・ブラス』の図書欄にマルセル・ブルーストの次作についてちょっとした記事を掲載していただけないでしょうか。作品は『失われた時を求めて ゲルマントの方』という題で出版予定です。『新フランス評論』がその長い抜粋をすでに掲載したことから、『フィガロ』が「結婚したオデット」というタイトルで新たな抜粋を掲載することも書いていただけますか。本は11月発売予定です。³⁷⁾

これらの手配をブルーストに報告する書簡のなかで、ルイ・ブランは興味深いことを述べている——「『デバ』にはこの種の欄がありませんので尋ねてみます、また近々ショメックスと会うことになっていますから、これらについて書いてくれるよう丁寧に頼んでみます」³⁸⁾。逆に言うと、そのような利用に供される欄を設けている新聞があったというわけである。

またルイ・ブランは『タン』の担当者ラウール・オブリーにたいしても記事掲載の依頼をしているが、それに先立って次の様子に書いている——

お気持ちと、とりわけお仕事を軽くされますように。私がお送りするすべての本について書く必要はありません。ご意向にかなうかと思ひ本をお送りましたのですが、『夜への回帰』と『信仰の誓い』についてはぜひお書きください。³⁹⁾

出版社と批評家の関係を示唆する一例である。『スワン』出版に際してベルナール・グラッセがブルーストに書いた内容を思いだそう。特定の新聞や、そのコラム名が具体的に挙がっていた。出版社は新刊宣伝に何をどう使うかを心得ていたのである。

そのような特定の新聞枠に比べ、批評記事となるとややハードルが高くなるようである。ブランシュの記事掲載が難航したことはすでに指摘したとおりだが、それは何もブランシュが文芸批評家としては知られていなかったからばかりともいえない。作品にたいして自分の意図しない批評がなされることを好む作家はいない。ブルーストもしばしば友人たちにこの種の不満を漏らしているが、同様の事態にアンドレ・ジッドも苦しんでいた。ブルーストにたいし、「『背徳者』と『狭き門』に起きたことがあなたにも起きているのです、どの批評家もこれらの作品に個人的告白を見ようとしたのです」⁴⁰⁾と書き送った書簡のなかで、そのような誤解を解くために『法王庁の抜け穴』について『フィガロ』に批評を執筆してくれないかと依頼している。これに対するブルーストの返答は否定的である。疲労が第一の理由であるが、掲載が難しいことも示唆してい

る。かつては『フィガロ』にかんしては社主であるカルメットが助力してくれたが、彼が亡くなった今となっては友人のロバール・ド・フレールの影響力がカルメットほどではない以上、掲載が実現するかどうかはよくわからないというのである⁴¹⁾。むろんこれはいささか言い訳めいているが、以上のことが事実であるとすれば、ブルーストは友人に恵まれていたと言わねばなるまい。文筆家である友人・知人は自ら記事を掲載することができたからである。

友人による批評

じっさい様々な友人たちがブルーストを話題にしてくれた。これら友人による批評は上述の依頼記事と一部重複する。ジャン・コクトーとブランシュの例はすでに挙げた。校正刷りを読んだときから作品について何か書きたいと表明していたリュシアン・ドーデの論評は、出版から約2週間後に『フィガロ』に掲載された⁴²⁾。

出版社探しに協力し、また小説のタイトルについても出版前に助言してくれたモーリス・ロスタンが『コメディア』紙に出した評は⁴³⁾、その賞賛の程度にブルーストも困惑したようである。ブルーストはベルナール・グラッセと書評について情報交換していたが、この記事の切り抜きを送るのをためらったほどだ⁴⁴⁾。上記のとおり、友人としてきわめて好意的な評を寄せたリュシアン・ドーデにも、あれには困惑したと述べている⁴⁵⁾。

ウィリーは、上述のブランシュの論評ならびに『新フランス評論』掲載の抜粋について1914年5月と6月に『スーリール』紙に記事を書いている⁴⁶⁾。同年7月初旬、ブルーストはジャック・リヴィエール宛の書簡で、ウィリーはこれまでも好意的な評を書いてくれたので、過剰にならないよう、彼には雑誌（おそらくは次の抜粋が掲載された7月号）を送らぬようにと指示している⁴⁷⁾。その協力関係を正確に裏付ける資料はないが、ウィリーの好意的な評は自ら進んで書いたものと推測される。批評とまではいかないが、ガブリエル・アストリュックとアンリ・ボルドーは、それぞれの音楽評欄・演劇評欄のなかでブルーストに言及してくれた⁴⁸⁾。

ブルーストは受賞しなかったが、1913年の文学賞に関連して2つの記事がブルーストの名をあげている。『ジル・プラス』はこの年のゴンクール賞についての記事のなかで、審議に当たってロニー兄がブルーストの作品は優れているが

立候補に必要な書類が提出されていないことを指摘した、と報じた⁴⁹⁾。『ラ・ヴィ・ウールーズ』誌は1914年2月号において『スワン家の方へ』を「今年最も重要な小説」と評した⁵⁰⁾。これは同誌の名前がついた文学賞関係者であったビエールブルグ夫人の影響によるものである可能性が高い。プルーストの献本は前年の同賞の選考に間に合わなかったようであるが、夫人やその娘婿でプルーストの友人でもあるジョルジュ・ド・ロリスが好意的な手紙を送ってくれたことをプルーストはルイ・ド・ロバール宛書簡のなかで述べている⁵¹⁾。

独立した批評

本稿で対象とした記事のうち21点は、出版側からの働きかけや了解なしに書かれたものと推測できる。もちろんプルーストが反論したからといって事前連絡のあった記事でないとはかぎらないし、友人の書いた記事はそれゆえに価値が減じられるべきでもない。けれどもプルーストが直接、間接に反論したことがわかっている記事は、プルーストの事前の関与を示す資料も見あたらず、おおむね本人の思惑とは関係なく発表されたもののようである。そのような記事で最も知られている一点について、その評価を再考してみよう。

ポール・スーデーの書評（『タン』）

ここで検討したいのは『タン』の書評欄に1913年12月10日付で掲載されたポール・スーデーによる記事である⁵²⁾。これは有名な書評欄であるだけでなく、プルーストが送った反論によっても良く知られることとなった。『タン』はプルースト側が手配したいいくつかの記事も掲載しているが、このスーデーの書評掲載をプルーストはベルナール・グラッセによって初めて知った⁵³⁾。したがって事前連絡はなかったと思われる。12月11日付の書簡でプルーストは、スーデーが批判したフランス語の誤りは印刷上のミスであると主張した後、スーデー自身が古典からの引用を間違っていることを皮肉っている⁵⁴⁾。この手紙があまりに有名になったため、スーデーはプルーストにひどく敵対的な批評家とされているのではないだろうか。

1919年にプルーストがゴンクール賞を受賞した後、同じ書評欄でスーデーは1913年の自分の判断がこの受賞によって支持されたことを喜ばしく思うと書いている⁵⁵⁾。この意見表明は、プルーストの反論を支持する読者にはスーデーの

自己弁護と受け止められるかもしれない。けれども実は彼は第1巻刊行時から必ず各巻を評した唯一の批評家であることを知っておいてもよいだろう。また『タン』の書評欄は新作ばかりを取り上げているわけではなく、名声の定着した作家や作品の刊本などもその対象としており、新刊小説などは複数を1回で評することもしばしばあった。この人気連載は、あまり間を置かずに本としても刊行されていたが、そのなかに全ての書評が再録されたわけでもない。1913年分は翌年に『「タン」の書評』シリーズ第2巻として早速まとめられているが⁵⁶⁾、『スワン』評はその全文が収められている。書評欄に単独で取り上げられ、しかも記事が本に再録されていることを見てもスーデーは『スワン家の方へ』に一定の評価を与えていたと考えて良いだろう。

この書評欄で新刊本を紹介するに当たって最も多く取られた手法は粗筋の紹介である。『スワン』はそのようなスーデーの方法に本来的に適さない。しかも予告されている三巻本の第1巻にすぎない。そのような事情にもかかわらずこれを取り上げたことは、スーデーがこの作品に示した興味のほどを示している。そもそも新聞の書評欄というのは忙しい読者のために読むべき本をセレクトし、紹介するのが本来の役割である。粗筋紹介というのも読者に内容をある程度理解させ、購入の是非を決定させるのに適した手法である。純粋な文芸誌とは異なり、新聞書評の場合、単に批判するために作品を取り上げることはむしろ珍しいケースであると言えよう。

記事の効果

これらの批評が読者個々人に及ぼした効果を詳しく知ることは難しいが、ガブリエル・アストリュックについては、ブルーストが反発したポール・スーデーの批評を見て第1巻を購入したことがわかっている⁵⁷⁾。しかも批判の対象となった数多くの誤植（スーデーはこれをブルーストの無知のせいにした）を余白に修正し、これを知ったブルーストがその版を借用して第4刷の修正に活かしたのである⁵⁸⁾。しかし我々がこのような経緯を知ることのできる読者は特殊な例である。

友人の協力やあまりに好意的すぎる評が反発も招くことは想像に難くない。じっさい、リュシアン・モーリーは『政治文芸評論』誌掲載の書評を次の様な皮肉で始めている——「マルセル・ブルースト氏は出版関係に、不注意なまで

に、不謹慎なまでに良き友人、献身的な友人達をお持ちだ」⁵⁹⁾。しかし一方、レジス・ジニユはプルースト自身もほめ過ぎと評したロスタンの記事を掲載の翌日に早速引用している⁶⁰⁾。

初期批評については当時の批評が作品にたいし好意的であったか否かがしばしば問題になるが、実はほとんどの批評記事は手放しに賞賛するのでもなければ単純に批判だけを行うのでもない。双方入り交じっているのが普通である。となれば、記事内容よりもその数に注目することも必要だろう。どんな記事も少なくとも作品への興味の証左であるのだし、ひとつの批評記事が出れば、これがさらなる記事を産む可能性は常にあるからだ。

今回対象とした記事を発表順に並べると、『スワン家の方へ』が発売された11月の末日までに掲載された広告を除く記事は12点、うち手配記事は10点、残る2点はそれらの記事にたいするコメントやそこからの抜粋であった。出版側の手配した記事は広告を除いて20点あった。発表が難航して遅くなったブランシュの記事とその反響記事4点、そして翌年6月以降の続刊抜粋に関連するもの2点、計7点を除いた13点中10点が最初の3週間に掲載されたことになる。この期間の宣伝活動が、その後発表された記事の多くを導いたという点できわめて重要であったといえよう。

『ゲルマントの方』抜粋とその効果

今回対象とした期間の終わりの状況を見ると、続巻の抜粋による効果も現れる。『新フランス評論』1914年6月号と7月号に長い抜粋が掲載され、『フィガロ』での連載も7月に予告されたことと、これについての記事をグラッセ社が複数の新聞に依頼したことは上記の通りであるが、実際にそのことを報じた記事は手配したのとは別の新聞・雑誌に4点掲載された。したがって連載そのものの効果なのか記事の効果なのかは判別しがたいが、この時点で11月刊行とアナウンスされていた第2巻の注文が早くもグラッセ社宛てに複数送られてきたことがわかっている。1件はフィレンツェの書店から、もう1件は特別版の予約であった⁶¹⁾。続巻の刊行は何よりの宣伝になったと言える。

結 語

総合すると次のように言えるだろう。『スワン家の方へ』発売にあたってグ

ラッセ社とプルーストは一定の宣伝活動を行った。その方法は、通常出版社として取りうる範囲に収まるものであったが、結果から見ると、その後の反響を準備することとなった。プルーストの友人たちが助力してくれたことは間違いなく、これはどの作家も望んで得られるものではなかった。個別の記事に対する反応の全体像は把握できないが、いずれの記事も発表媒体の購読者数に応じ、プルースト作品の出版を世間に知らしめる役割を果たしたと考えられる。

当然と言えばあまりに当然すぎる結論かもしれない。何の秘策もドラマチックな展開もない。けれども評判が広まったとか、有名になったとか、あるいは不当に評価されていたなどと簡単に書いてしまう代わりに、その内実を具体的に認識することこそ、現在の問題意識の過去への投影という、いつの時代も研究者が気づかずして陥りがちな罠から少しでも遠ざかる方法なのである。

註

- 1) 本稿執筆にあたって使用した資料の一覧については、次の拙論を参照のこと——Tomoko Boongja Woo, *La Réception d'«À la recherche du temps perdu» en France de 1913 jusqu'en 1954*, thèse de Doctorat, Univ. de Paris III, 2011, 2 vol. ただし本稿ではこれに若干の記事を追加して分析に使用した。また上記論文でも『スワン家の方へ』受容にかんし1章を割いているが、本稿はこれとは別の視点から資料分析したものである。また稿中、プルーストの書簡については全てフィリップ・コルブ編集の版 (Philip KOLB éd., *Correspondance de Marcel Proust*, Paris: Plon, 21 vol., 1970-1993) に依った。引用に際してはこれを *Corr.* と略す。書簡の日付がコルブによる推定の場合、括弧〔 〕内にこれを記載する。
- 2) これらの事情については多くの研究者が言及しているが、次の研究書が最も詳細である——Franck LHOMEAU et Alain COELHO, *Marcel Proust à la recherche de l'éditeur : «À la recherche du temps perdu» face à l'édition*, Paris: Olivier Orban, 1988.
- 3) ベルナル・ブランの意見である——「1913年から1914年には新聞、雑誌に書評が多く出た。けれどもそれはプルーストがあらゆる友人に頼み込み、時にはこれら友情による書評のため(有料の)消息欄さえ使ったからである」(commentaire de Bernard BRUN, in Marcel PROUST, *Du côté de chez Swann*, Paris: GF Flammarion, 1987, p. 648)。
- 4) 1914年1月11日、ジッドはプルーストに宛てて「この本の出版を拒否したことは、NRFの最も重大な誤り」となるだろうし、この件に大いに責任がある以上、自分に

- とっても「生涯で最も痛切な後悔と呵責の種」であろうと書いている。*Corr.*, t. XII, lettre 12, p. 53.
- 5) パスカル・フラヴァロ＝ターヌはブルースト受容にかんする近著のなかで完全にこの紋切り型を踏襲している (voir Pascale FRAVALO-TANE, «*À la recherche du temps perdu*» en France et en Allemagne (1913-1958): «*Dans une sorte de langue étrangère...*», Paris: Champion, 2008)。出版社による拒否については43-46頁, 第1巻刊行後の反響の少なさと友人の協力については51-52頁, ゴンクール賞については65-80頁参照。受賞の効果を扱ったセクションは「ゴンクール賞, 栄光の始まり」と題されている。
 - 6) FRAVALO-TANE, *ibid.*, p. 57.
 - 7) *À la recherche du temps perdu*, éd. Pierre CLARAC et André FERRÉ, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 3 vol., 1954.
 - 8) 後註12参照。
 - 9) *Corr.*, t. XIII, lettre 240, pp. 408-409.
 - 10) ANONYME [Éd. Grasset], «Vient de paraître», *Bibliographie de la France*, 14 novembre 1913, III^e partie, pp. 3726-3727.
 - 11) ANONYME [Éd. Grasset], «[Publicité]», *Mercure de France*, 16 décembre 1913, [entre la couverture et la première page numérotée].
 - 12) *Corr.*, t. XIII, lettre 8, note 18, p. 41. コルブは「ジロー＝バダン書店主クロード・ゲラン氏」がこの宣伝文を提供してくれたと述べている。
 - 13) ブルーストは出版に先立ってまずルネ・ブルムに様々な依頼をしている。Voir *Corr.*, t. XII, lettre 134 à René Blum.
 - 14) たとえばブルーストは1913年11月16日付の『フィガロ』に記事を掲載してくれたことをカルメットに謝している (voir *Corr.*, t. XII, lettre 154)。同時にロベール・ド・フレールには今のところ消息記事で十分であるから書評はまだ出さないようにと連絡している (voir *Corr.*, t. XII, lettre 155)。
 - 15) ブルーストは友人のジャック＝エミール・ブランシュが発表した書評の抜粋を『メルキュール・ド・フランス』に掲載するようヴァレットに直接依頼している (voir *Corr.*, t. XII, lettre 74)。ブランシュの書評については後述。
 - 16) Voir *Corr.*, t. XII, lettre 133 à Mme Schéikevitch.
 - 17) Voir par exemple *Corr.*, t. XII, lettre 193 et t. XIII, lettre 21 [lettres de Reynaldo Hahn à Mme la Comtesse de la Béraudière].
 - 18) 順に以下の記事のことである——LES UNS [pseud. de René BLUM], «Les lettres. Un roman de Marcel Proust», *Gil Blas*, 9 novembre 1913, p. 3; LE MASQUE DE FER [pseud. de Robert DREYFUS], «Écho. *À la recherche du temps perdu*», *Le Figaro*, 16 novembre 1913, p. 1; Élie-E. BOIS, «Variétés littéraires. *À la recherche du temps perdu*», *Le Temps*, 13 novembre 1913, p. 4 [interview de Marcel Proust]; ANONYME, «Le courrier littéraire. Gens et choses de lettres. *Du*

- côté de chez Swann*», *Le Temps*, 21 novembre 1913, p. 4 [comprend un extrait].
- 19) «Le livre du jour. *Du côté de chez Swann*, par Marcel Proust. Chambre de province», *Les Annales politiques et littéraires*, 23 novembre 1913, année 31, n° 587, p. 468 [extrait]. この原稿の送付についてはルネ・ブルム宛の次の書簡参照——*Corr.*, t. XII, lettre 136.
 - 20) ルイ・ド・ロベール宛の次の書簡参照——*Corr.*, t. XII, lettre 164. 問題の記事は次のもの——Jean COCTEAU, «La Galerie des bustes. Marcel Proust», *Excelsior*, 23 novembre 1913, p. 3.
 - 21) Voir *Corr.*, t. XII, lettre 187 [9 décembre 1913].
 - 22) Voir *Corr.*, t. XIII, lettre 242 [peu avant le 19 décembre 1913].
 - 23) 前註 17 に挙げた書簡を参照。コルブによる推定日付はそれぞれ 1913 年 12 月 19 日, 1914 年 1 月 18 日。
 - 24) Jacques-Émile BLANCHE, «*Du côté de chez Swann*», *L'Écho de Paris*, 15 avril 1914, p. 1. その間の経緯については次の書簡参照 (いずれも 1914 年のもの) ——*Corr.*, t. XIII, lettre 25 à R. Hahn [peu avant le 25 janvier]; lettre 27 à Lucien Daudet [25 janvier]; lettre 34 à J.-É. Blanche [29 janvier]; lettre 35 à R. Hahn [29 janvier]; lettre 41 de R. Hahn à Mme la Comtesse de la Béraudière [2 février]; lettre 58 à Bernard Grasset [28 mars].
 - 25) *Corr.*, t. XIII, lettre 70 [15 avril 1914], p. 146.
 - 26) *Ibid.*, lettre 71 [15 avril 1914], p. 149. 費用の件については次の書簡も参照のこと——*Ibid.*, lettre 79 à René Blum [19 avril 1914]; lettre 113 de Louis Brun à Marcel Proust, datée du 16 mai 1914.
 - 27) *Ibid.*, lettre 72 [15 avril 1914], p. 150. 問題の 2 紙に掲載された記事は次の通り——LE DIABLE BOÎTEUX, «Échos. Un nouveau critique littéraire», *Gil Blas*, 18 avril 1914, p. 1; LE MASQUE DE FER, «À travers Paris», *Le Figaro*, 18 avril 1914, p. 1.
 - 28) このうち実現したのは『メルキユール・ド・フランス』への掲載である——R. de BURY, [pseud. de Remy de GOURMONT], «Revue de la quinzaine, les journaux. M. Jacques-Émile Blanche critique littéraire (*Écho de Paris*, 15 avril)», *Mercur de France*, 1^{er} mai 1914, pp. 171-172. この掲載を依頼する書簡については前註 15 の通り。
 - 29) ANONYME, «Au jour le jour. M. Jacques-É. Blanche critique littéraire», *Journal des débats*, 24 avril 1913, p. 1. この費用もプルーストが負担している (voir *Corr.*, t. XIII, lettres 85, 93, 94 et 111)。
 - 30) Annick BOULLGUET, *Marcel Proust : bilan critique*, Paris : Nathan, 1994, p. 63.
 - 31) *Corr.*, t. XIII, lettre 76, p. 154. 原稿にかんしては次のものも参照のこと——*Ibid.*, lettre 81 à Louis Brun [20 avril]; lettre 85 de Louis Brun au *Journal des*

- Débats*, datée du 22 avril 1914.
- 32) プルーストは、ブランシュは『ジュルナル・デ・デバ』に友人が多いから、くれぐれも本人に知られないようにとロイ・ブランに念押ししている。Voir *ibid.*, lettre 78 [19 avril 1914], p. 157.
 - 33) *Corr.*, t. XII, lettre 146, p. 315. 原文イタリック。
 - 34) *Corr.*, t. XIII, lettre 76, p. 154.
 - 35) 上記書簡の註 5 参照。問題の記事は次のもの—— André ARNYVELDE, «À propos d'un livre récent. L'œuvre écrite dans la chambre close. Chez Marcel Proust», *Le Miroir*, 21 décembre 1913, année 3, nouv. série, n° 5, [p. 39].
 - 36) ANONYME, «Ceux et celles dont on parle», *Le Miroir*, 14 décembre 1913, année 3, nouv. série, n° 4, [p. 34].
 - 37) *Corr.*, t. XIII, lettre 152, datée du 20 juillet 1914, p. 268. この他の依頼については同じく書簡 150, 151 番を参照。
 - 38) *Ibid.*, lettre 153, p. 269.
 - 39) *Ibid.*, lettre 151, p. 266.
 - 40) *Ibid.*, lettre 141, p. 250.
 - 41) *Ibid.*, lettre 143, pp. 253-254.
 - 42) Lucien DAUDET, «Du côté de chez Swann», *Le Figaro*, 27 novembre 1913, p. 1. [Repris dans *Autour de soixante lettres de Marcel Proust*, Paris: Gallimard, 1929, pp. 81-86.] この書評発表の経緯については次の書簡参照のこと—— *Corr.*, t. XII, lettres 116 et 117 [début septembre 1913].
 - 43) Maurice ROSTAND, «Quelques lignes à propos d'un livre unique», *Comoedia*, 26 décembre 1913, p. 1.
 - 44) Voir *Corr.*, t. XIII, lettre 5, datée du 5 janvier [1914].
 - 45) Voir *Corr.*, t. XIII, lettre 27 [25 janvier 1914].
 - 46) WILLY [Henri GAUTHIER-VILLARS, dit], «[Commentaire sur l'article de J.-É. Blanche paru dans *L'Écho de Paris*: 1914.04.15]», *Le Sourire*, 21 mai 1914; «À la Flan», *Sourire*, 18 juin 1914, p. 3.
 - 47) Voir *Corr.*, t. XIII, lettre 146.
 - 48) それぞれ次の記事のなかでプルーストについて言及している—— Gabriel ASTRUC, «À propos d'un temple enseveli», *Gil Blas*, 15 décembre 1913, p. 1; Henry BORDEAUX, «La Vie au théâtre», *La Revue hebdomadaire*, 14 février 1914, pp. 266-292. アンリ・ボルドーは実際には作品そのものではなく、『アナル』紙に掲載された抜粋（前註 19 参照）を読んだもののようである。
 - 49) Claude FRANCUEIL, «Un scrutin épique. Le Prix Goncourt», *Gil Blas*, 4 décembre 1913, p. 1.
 - 50) ANONYME, «Ce qu'il faut lire. Livres. Marcel Proust. *Du côté de chez Swann* (Grasset, édit.)», *La Vie heureuse*, 5 février 1914, p. vii.

- 51) *Corr.*, t. XII, lettre 171 [vers la fin novembre 1913].
- 52) Paul SOUDAY, «Les livres. *À la recherche du temps perdu*», *Le Temps*, 10 décembre 1913, p. 3.
- 53) Voir *Corr.*, t. XII, lettre 188 à Jean-Louis Vaudoyer [le mardi soir 9 décembre 1913].『タン』は発行日の前日には配布されるのでこの日付は不自然ではない。ところでジャン＝イヴ・タディエはその伝記『マルセル・ブルースト』のなかでこの記事にたいするブルーストの感想を示す例としてコクトー宛の書簡(*Corr.*, t. XII, lettre 159)を引用しているが(voir Jean-Yves TADIÉ, *Marcel Proust*, Paris: Gallimard, 1996, p. 708 et note 7), これは誤りである。タディエが問題にしている書簡でブルーストは『エクセルシオール』掲載記事の校正を見せてくれるよう依頼したと書いているが、この記事は11月23日付で発表される。したがってこの手紙はそれより前に書かれたものなのである。じっさい、コルブによる推定日付は11月21日である。
- 54) *Corr.*, t. XII, lettre 191.
- 55) Paul SOUDAY, «Les livres. *À la recherche du temps perdu*: tome I: *Du côté de chez Swann*; tome II: *À l'ombre des jeunes filles en fleurs*. – *Pastiches et mélanges*», *Le Temps*, 1^{er} janvier 1920, p. 3.
- 56) Paul SOUDAY, *Les Livres du Temps* (deuxième série), Paris: Émile-Paul frères, 1914. 本稿の冒頭で指摘した図書1点とはこのことである。
- 57) Voir Gabriel ASTRUC, *Le Pavillon des fantômes: souvenirs*, Paris: Grasset, 1929, pp. 304-305.
- 58) Voir *Corr.*, t. XII, lettre 192 à Gabriel Astruc [peu après le 9 décembre 1913].ブルーストはアストリュックに、彼が書き込みをした版と自分の手許にただ1冊残っている初版とを交換してくれるよう頼んでいる。
- 59) Lucien MAURY, «Les lettres, œuvres et idées. Romans. *Du côté de chez Swann. À la recherche du temps perdu*», *La Revue politique et littéraire*, 27 décembre 1913, année 51, t. 2, p. 821.
- 60) Régis GIGNOUX, «Courrier des théâtres», *Le Figaro*, 27 décembre 1913, p. 4.
- 61) コルブによると、フィレンツェの件についてはルイ・ブランがまだ注文はできない旨6日8日に回答したとのことである(voir *Corr.*, t. XIII, lettre 132, note 5, p. 234)。もう1件についてはこれを受け付けている(voir *ibid.*, lettre 148, p. 261)。